様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４０４

研究課題名（和文）都市の日常をめぐるルポルタージュ的作品に関する研究

研究課題名（英文）A study of French reportages on the urban everyday life

研究代表者
塩塚　秀一郎（SHIOTSUKA, SHUICHIRO）

京都大学・地球環境学堂・准教授

研究者番号：７０３３３５８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：最近二十年ほどのフランス文学を特徴づける潮流のひとつとして、都市生活の中でふだん着目されることのない「日常」に着目し記録しようとする、一群のルポルタージュ的作品がある。フランソワ・マスペロの『ロワシー・エクスプレスの乗客』（一九九〇）、フランソワ・ボンの『鉄路の風景』（二〇〇〇）、フィリップ・ヴァセによる『白い本』（二〇〇七）などである。これらはいずれも誰の注意も引かない日常の風景を書きとめようとする実験的試みである。本研究では、これらの著者たちが風景をいかに記録しているかを具体的な記述に即して論じ、それを通じた現代社会批判の射程について考察した。

研究成果の概要（英文）：In the past few decades in France, a number of works of reportage have attempted to set down the everyday aspects of urban life that usually go unnoticed. One good example is Francois Maspero's Roissy-Express: A Journey Through the Paris Suburbs (1990). Francois Bon's Iron landscape (2000). There is also A Blank white paper (2007) by Phillipe Vasset. All these works might be described as experimental attempts to notice everyday topographies that would otherwise escape people's attention. In this study, firstly I discussed the writers' perspectives, making specific reference to their descriptions. Secondly I considered the extent of contemporary social criticism that is inherent in each attempt.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学

キーワード：都市　日常　破壊　制約　ペレック

１．研究開始当初の背景

研究代表者はペレックの自伝的背景を考慮しつつ、日常をめぐる彼の作品を読み解くことにより、ペレックにおける「日常の探求」は、喪失の経験に由来していると考えるようになった。ユダヤ系であるペレックは戦争とホロコーストによって父母を幼時に失っているのだが、いつまでも続くと思われた「何げない日常」が一瞬にして奪われてしまったという切実な体験が、執拗なまでの「日常の記録」の淵源となっているようなのだ。

ペレックの書法に特有の細密な描写や列挙が単に作家の「嗜好」、「癖」ではなく、上記のような「喪失」、「消滅」あるいは「時間の暴力」といった認識や感情と密接に結びついていることが判明するにつれ、ペレックの影響を受けたとされる後続の作家たちによる類似の試みも、単なる遊戯や酔狂を超えた真剣な文学的営みとみなされるようになり、その意図や射程をはかることが重要性な課題として現代文学の研究者に認知されるようになってきた。

２．研究の目的

本研究の主軸となるのは、「都市の日常をめぐるルポルタージュ的作品」群の読解を通じて、これらに固有の意図や批評意識、世　界観を明らかにすることである。本研究においては、文学者の手によって、文学的方法のひとつとして採用された「都市の日常の徹底描写」を考察の対象とする。こうしたジャンルのテクストを紹介するとともに、その特質・志向性を見出し、世に発信していくことが課題となる。対象として考えられるのは、以下のようなテクストである。フランソワ・ボン『高速道路』(1999)、『鉄の風景』(2000)、　『大宇(デウ)』(2004); フランソワ・マスペロ『ロワシー・エクスプレスの乗客』(1990); ジャン・ロラン『ゾーン』(1995);オリヴィエ・ロラン『クリスタル・ホテルから』(2004)など。

３．研究の方法

本研究を遂行する上での基盤であり、なおかつ、もっとも重要となる作業は、「都市の日常をめぐるルポルタージュ的作品」群の読解・分析である。その際、(1)ペレックによる各種試みと「並以下のもの」概念の分析、(2)後続作家による試みの背景、射程、意義、(3)後続作家たちの 試みに及ぼしたペレックの影響、といったポイントから、それぞれのテクストを分析していく。とりわけ、各作品がどのような場所を描写の対象に選んでいるか(工業地帯、工場、鉄道、広場など)、については、出版当時の社会情勢なども考慮にいれつつ、歴史学、社会学などの知見も借りて慎重に考える必要がある。また、純粋に「客観的な描写」はありえない以上、各試みにおいて、選ばれた場所の、何が拾い上げられているのか、という点を特に注意深く見定めなければならない。

４．研究成果

（１）我々はまず、現代フランスの作家フランソワ・ボンの著作、とりわけ『高速道路』、『鉄路の風景』、『デーウ』を中心に研究を行った。ボンは『高速道路』のエピグラフとしてペレックの「何に着目すべきか ?」の一節を挙げている。このエッセイで提案されているのは、あまりに慣れすぎていて認識できない日常を捉えるには、普段なら行わない不自然かつ不要な行為を主体に強いることが有用である、との考え方である。『高速道路』でボンが行っているのも、一週間高速道路から出ずに、料金所やパーキングを眺めるという自らへの拘束であった。『鉄の風景』では、同一曜日、同一時間、同一車両の鉄道で、移動を繰り返すという制約を自らに課している。ここでは、制約に「反復」の要素が加わることで、一瞬で目の前を過ぎ去っていくありふれた風景について、その背景や来歴を考えるよう促されることになっている。こうして、ボンの目がひきつけられるのは、「消え去った世界の痕跡」である。車窓という、あらゆるものが一瞬にして過ぎ去る枠組みを通して眺めているだけに、「はかなきもの」への愛惜はいっそう高まっているようである。『デーウ』の主題は、鉄道路線のそばからも姿を消しつつあった工場である。ボンは、ペレックの『W あるいは子供の頃の思い出』やボルタンスキーによるインスタレーションなどを巧みに喚起しつつ、産業社会の人間軽視や効率至上の価値観を告発している。日常を通じての社会批判は、一見目につきにくいものの、ペレックの試みにもすでに含まれているものである。ボンは、視線に無理強いすること、すなわち、「技法」や「制約」を課して現実を眺めることにこそ、ペレックが残した最良の遺産をみているが、この評言はボン自身の方法や問題意識をも言い当てるものとなっている。

（２）つぎに我々は、都市生活の中でふだん着目されることのない「日常」を記録しようとする、一群のルポルタージュ的作品を互いの関係に配慮しつつ考察した。フランソワ・マスペロの『ロワシー・エクスプレスの乗客』(一九九〇)は、パリを縦断する郊外鉄道のすべての駅で降りて、とりたてて観光資源もない界隈を散策する試みを記録したものである。フランソワ・ボンの『鉄の風景』(二〇〇〇)は、パリと地方都市ナンシーのあいだを走る列車の車窓風景を半年間に

わたって繰り返し書き留めた作品である。また、フィリップ・ヴァセによる『白い本』(二〇〇七)は、誰の注目も引かない風景をパリ市内に求めた試みと言えよう。パリ市の地図では、取り壊し中の建築物や廃棄物が放置された空き地など、さまざまな理由で正確な表記になじまない空間が白地のまま残されている。『白い本』は著者がこうした区画を実際に訪れてみた記録である。

我々はまず、上記の作品に関して、誰の注目もひかない場所や日常の風景をこれらの著者たちがなぜわざわざ記録しようとしたのか、という問題を考察した。結論を端的に記すと、日常の風景が萌芽あるいは痕跡として抱えている〈破壊〉の契機が、彼らの記録の衝動と深く関わっていることが判明した。たとえば、マスペロが訪れたパリ近郊の町の多くは、普仏戦争から第二次大戦に至るまで、たびたび戦禍に見舞われてきた。アウシュヴィッツへの玄関口となったドランシーの集合住宅は、「破壊の痕跡」の最たるものであろう。一方、ボンが記録したフランス北東部の町々は、産業構造の変化により工場閉鎖にみまわれ、衰退を余儀なくされている。

フィリップ・ヴァセは『白い本』において、パリの地図上に空白のまま残されている区画を実際に訪れ、その場所の実態を報告している。彼はその探訪中に何度も戦場を歩いているような気がしたといい、自分の企ては結局、戦争の痕跡を調査することだったのだ、と述べている。さらに、ヴァセは自分の計画がそもそもの出発点から本物の暴力とも関わるものであったとも言う。軍事施設もまた地図上では白く表示されるからである。

このようなヴァセによる指摘を踏まえてボンとマスペロの記述を振り返ると、ヴァセも含む三者の企てが期せずして暴き出すことになったのは、現代の都市政策がもつ根源的な非人間性であることが分かる。つまり、上記の書物はいずれも、戦争、産業構造の変化、資本の論理などがもたらす日常風景の〈破壊〉を記録することにより、現代社会への批判となっているのである。

マスペロ、ボン、ヴァセらの企てにとって先駆的役割を果たしたジョルジュ・ペレックは、パリの日常を書きとめる際、自らの行動指針を次のように記している。「もっとゆっくり、ほとんど馬鹿らしくなるほどでないと。つまらないこと、明白きわまりないこと、ごくありふれた、さえないものを、強いて書きとめるのだ」。このようなプログラムは、「文学的価値観」と「社会的価値観」の二つの次元で、反時代的振る舞いとなっている。本研究によって、マスペロ、ボン、ヴァセの三者も、ペレックに通じる反時代的身ぶりで、現代社会の日常的風景を襲う破壊に抗おうとしていることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

（１）塩塚 秀一郎、日常と破壊：現代フランス文学における都市の視線をめぐる実験、文学と環境、査読有、刊行予定。

（２）塩塚 秀一郎、フランソワ・ボンによる〈並以下のもの〉の探求：ペレックの「社会学的仕事」を受け継ぐ試み、人文社会科学研究（早稲田大学創造理工学部）、査読無、52 号、2012、21-36

（３）塩塚 秀一郎、ペレックと廃墟：〈並以下のもの〉へのまなざし、人文社会科学研究（早稲田大学創造理工学部）、査読無、51 号、2011、1-14

〔学会発表〕（計４件）

（１）Shuichiro SHIOTSUKA, Three literary works of reportage inspired by Georges Perec's method, A Transdisciplinary Conference on the Work of Georges Perec, 2014 年 3 月 28 日、Teesside University (England)

（２）塩塚 秀一郎、パリ使用法、日本フランス語フランス文学会ワークショップ「クノー使用法」、2013 年 10 月 27 日、別府大学

（３）Shuichiro SHIOTSUKA, La fonction du savoir imaginaire dans *La Vie mode d'emploi* de Georges Perec, Science imaginaire, 2012 年 11 月 8 日, Université Paris-Est (France)

（４）Shuichiro SHIOTSUKA, Deux romans lipogrammatiques en japonais、L'Oulipo à 50 ans, 2011 年 10 月 6 日, University of Buffalo (USA)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
塩塚　秀一郎（SHIOTSUKA, Shuichiro）
京都大学・大学院地球環境学堂・准教授
研究者番号：70333581

研究者番号：

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：